二瓶重直先生の足跡

塩田　昇

この度，二瓶先生の御退職に当たって，先生の学問的足跡を紹介する一文を書くよう編集委員から依頼があった時，私の如き若輩では荷が重すぎると思ったが，経歴や学問の関心の持ち方など何かと相通じる点があり，言語学講義の授業も先生から担当を引き継いだことでもあり，むしろ喜んでお引き受けした。以下，先生の略歴に沿って，先生の学問的発展をかいつまんで紹介させて戴き，以て先生の本学，並びに学界への御貢献に対する，ささやかながら私達本学英文学会の捧げる感謝のしるしの一端としたい。

二瓶先生は昭和4年，東京帝国大学英文学科に入学し，同7年に言語学科に転入して，10年に卒業なさっている(一年上に日本を代表する言語学者，服部四郎氏がおり，氏も英文から言語へ移っている)。卒論は Old English から Middle English への音韻史的考察で，ゲルマン的基層 (Substratum) に Norman French が上層 (Superstratum) として重なったとの言語層論と，Henry Sweet の Organic Basis (調音基底) の考え方が方法論的土台であった。そしてこの2つは，前者についてはもっぱら征服・非征服の時間的に縦の関係に意を注ぐ限界を乗り超える為イタリア新言語学の Adstratum(傍層) の考え方を導入して通時・共時を止揚する汎時論的方向で，後者についてはフランスの音韻史家 P. Fouché の考え方に接近するような方向で幅と洗練の度を増すが，先生のその後の学問の基本的骨子を作ったことは間違いない。卒論の対象が英語の音韻史というのも言語学を志す者であれば当然の母国語史への関心を更にかきたてた要因の1つであろう。意外なことと思われる向きもあろうが，英語史の複雑さを理解する先生が後に謎に満ちた日本語形成史に挑戦し，それを解

く鍵をある程度手に入れたとは両言語，両歴史文化に関心のある者なら納得いくはずである。

先生は昭和14年には台北帝国大学文政学部言語学教室の助手になり，終戦後までそこで南方諸語並びに文化，中国南部呉越系の言語・文化の研究を集中的に行って後の遠大なる日本語形成の仮説の輪郭を得たようだ。それが昭和28年の『民族研究』第17巻3～4号に載った「国語基層論――調音基尾について」で実を結ぶ。そこにおいて，互いに遠く隔たった東北方言と出雲方言が共通にメラネシア的性格を持つこと，これに対し高知方言はインドネシア的であり，前者が縄文文化に後者が弥生文化に連なることを指摘し，学会に反響を呼んだ。尚，この年には成蹊大学政治経済学部専任講師（英語）に就任なさっている。昭和40年には同大の論叢第16巻3号に「言語史推考」を発表して，橋本進吉博士の《上代特殊假名遣い》の甲乙2種の音価推定について先生の仮説に内包されていた推定との関連づけを行っている。同44年には同大法学部教授となられた。

その後昭和46年，創価大学開学と同時に文学部英文科教授として移って来られ，英語学・言語学・音声学更に英語表現演習などを担当されてきた訳だが，46年の本学開学記念論文集では「言語系統論」を寄稿している。そこにおいて伝統的な系統樹説の限界を指摘し，R. Jakobson 等の Sprachbünde の考え方を紹介して尚一層の方法論的洗練を追及していることが窺われる。同52年には本創価英文学会の『英語・英文学研究』第2巻1号の「言語学における調音基底と基層論」で独仏語からフィンランド・ハンガリー語更にウラル＝アルタイ諸語，朝鮮語を経て日本語に至る口蓋化の共通の傾向を探るという雄大な仮説を提示して，しかも日本語の会口性の退化を推古期であるとの推察と結びつけている。先生の気宇壮大なる理論は最終的には『私の言語学――調音基底的基層論』（昭和62年刊，増補改訂版同63年，尚この御著作は61年創価大学創立15周年記念論文集で「言語史の諸問題――序説」のタイトルのもと既に発表されていたものを序論にして本論と余論，詳細なる註を付したものである）にまとめ上げられたが，ここに卒論以来の考え方が総て有機的に統合されて流れ込

み，しかも卓越した理論のみに見られる予言力も備えた射程の広い説明力を獲得している感を与えるのは先生の学問的発展が深い洞察に発し，実証的検討ともう一方の方法論的洗練による不断の自説への批判と鍛練を通してであったことが分かる真に立派な御業績の頂点を成している。内容の詳細は『学光』(平成元年2月号）に筆者による書評があるので参照されたい。ただ1つだけ，最初の西から東への大民族移動であったかもしれないウィーン文化史家の Heine-Geldern の提示した Pontische Wanderung（あのモーツァルトのオペラ『ポントの王ミトリダーテ』の舞台小アジアのポントゥス付近に BC. 3000 年頃に始まる民族移動）の説が先生の理論の構想力の1つの源泉になったことは，この説が専門家の間でもあまり知られていないだけに，ここに特記しておきたい。ここまで先生の関心があり，しかも一方で藤ノ木古墳等の最近の考古学的知見にまで関連を見つけようという大きさには感動を禁じ得ない。(先生には他に英語語法に関する論考がいくつかあるが，ここでは紹介を割愛した。)

御自身の健康への配慮からだと察するが，先生が『私の言語学』で自分の学問の総括を自ら宣言してしまったのは残念な気もする。もっともっと先に進めていける理論なのだから。しかし，このような区切りの付け方は，テニスと散歩を愛し，背筋もピンとした長身の先生のお姿に似つかわしいスマートな爽快さも感じる。この間，私はキャンパス付近で先生に偶然お会いしたが（入院療養で本年度は大学はお休みになられていた)，病後にも拘らず驚く程元気なお姿を拝見したのは嬉しい限りであった。御退職後も若さをいつまでも保持されて悠々自適の生活を送られることをお祈り申し上げると共に，本英文学会を暖かく見守り，宜しく御指導下さることをお願いする次第である。